

【研究主題】 先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進



I 研究発表と協議

【協議題①】

未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定

<発表題>

先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

沖縄県名護市立名護小学校 校長
仲宗根 勝也

<発表概要>

本分科会は、沖縄県北部の名護市にある大規模校の名護小学校、海に囲まれた瀬底島にある小規模校の瀬底小学校、山林に囲まれた東村にある極小規模校の高江小学校、豊かな自然に恵まれた大宜味村にある小規模校の大宜味小学校の4校で構成された分科会である。4つの市町村で学校規模も大きく異なるため、「学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進」の主題のもと、共同研究員個々の学校の特色を生かした経営ビジョンを策定し、各々の実践を通して得た成果や課題を考察し共有しながら研究を深めていくこととした。明確でわかりやすい学校経営ビジョンを策定し、それを教職員だけでなく児童・保護者・地域に共有することで、学校や地域の特色を生かした創意ある学校経営ができると仮説を立て、以下の視点で研究を推進した。

(1) 名護市立名護小学校の実践

- ① 明確なビジョンの策定と共有
- ② 創意ある「きく」学校経営の推進
- ③ 校長の関わりと今後の方向性

(2) 本部町立瀬底小学校の実践

- ① 明確なビジョンの策定と共有

- ② 創意ある学校経営の推進
 - ③ 校長の関わりと今後の方向性
- (3) 東村立高江小学校の実践
- ① 明確なビジョンの策定と共有
 - ② 創意ある学校経営の推進
 - ③ 校長の関わりと今後の方向性
- (4) 大宜味村立大宜味小学校の実践
- ① 明確なビジョンの策定と共有
 - ② 創意ある学校経営の推進
 - ③ 校長の関わりと今後の方向性

<協議の概要>

- (1) 明確なビジョンを策定し、教職員だけでなく児童・保護者・地域と共有を図っていくためには、まず、企画・立案の段階で、児童の実態からこれからの未来を見据えたつきたい力を明確にすることが重要であり、具体化した上で共有することで参画意識や当事者意識を高めることができる。
- (2) 創意ある学校経営を推進していくためには、本発表における実践のように、大規模校、小規模校それぞれの特色ある地域教育資源を積極的に活用していくことで、接続可能で魅力的な教育活動の展開を図ることができる。
- (3) 校長の関わりと今後の方向性の示し方について、本研究において「児童の声が届く学校」「保護者の声が届く学校・地域」の実践を通して具体的な事例として示された。また、学校課題を軸にプロジェクトチームを機能させることが効果的である事例も示された。
- (4) 他県の取組として、大分県では、校長が学校経営ビジョンを示す際に、県内で共有した観点（4点セット）を設けている。このことにより、



教職員に浸透しやすく、具体化を図る手立てとなっている。

【協議②】

学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

<発表題>

学校経営ビジョンの最適化とその実現を図る過程の追究 ～校長赴任1年目の省察的実践型の取組を通して～

佐賀県佐賀市立新栄小学校 校長
中村 尚志

<発表概要>

佐賀市小中学校校長会（小学校35校，中学校18校）の研修会では，学校経営に係る当面の課題について各校の現状や取組を共有し，校長会全体の課題意識をもってその解決に向けた方策を協議している。本研究では，校長赴任1年目に，どのようにしたら最適な学校経営ビジョンを掲げることができるか，そしてどのようにしてそのビジョンの実現を図るかという課題を取り上げる。「校長赴任1年目の学校経営ビジョンの生み出しとその実現」をテーマとし，省察的実践型の取組を意識して，課題追究のための実践と検証に取り組んだ。なお，本研究は，佐賀市校長会の事例研究を進めるにあたり，この課題を研究テーマとして取り組んだ佐賀市立新栄小学校の事例研究である。

(1) 学校を「知る」ことで見出した重点課題

- ① “問い”の投げかけ
- ② 学校を「知る」
- ③ 浮き上がる重点課題と課題解決の道筋

(2) 学校経営ビジョンの最適化

- ① 「こんな学校にしたい」の立ち上がり
- ② キャッチフレーズの活用
- ③ キャッチフレーズの周知

(3) 不適応を起こしている子どもの組織的対応

- ① 個別の対応と集団の育成の両輪
- ② 個別の対応
- ③ 集団の育成

<協議の概要>

(1) 最適な学校経営ビジョンを掲げるためには現状及び課題を把握することが大切になる。本研究における「学校を『知る』」段階で，「学校の全体像の把握表」を作成されたことは効果的であった。文化・伝統，児童，教職員等細分化した視点で現

状を把握することで，重点課題が明確になってくる。このような把握の仕方等を引継ぎ資料として前任校長と共有することも有効だと考える。

- (2) 学校目標の共有について，本研究ではキャッチフレーズを活用された。抽象的な言葉を，より具体的な児童の姿として提示し，教職員と共有された。学校経営ビジョンの実現を図るうえで重要である。このように定義，解釈について毎年しっかりと問い直し，確認していくことが必要である。
- (3) 学校経営ビジョンの実現を図る過程において，校務分掌の3部会に依拠して，3つの重点課題として提示された。丁寧な実態，課題把握と課題解決のための方向性が示されていたことが，3部会での具体的な取り組みにつながった。

II まとめ

協議1において，校長はビジョンを描き，ビジョンを創り，夢を語る役割を担っていることを実感した研究協議会となった。また，船の先導者として乗組員を束ね，どの方向に向かうのかという対話の場を重ね，教職員をはじめとする関係者とよい関係性をつくったり，向かう先を照らしたりする役割を担っているということも共有することができた。これからは子供たちが生きる未来社会を見据えた明確なビジョンを掲げ，学校や地域の特色を生かした創造と活力溢れる学校経営を目指していきたい。

協議2においては，『ビジョンを掲げ，それを実現するためには何をすればよいか』について議論が深められた。校長自身が明確なビジョンを持つことは前提であるが，それ以外にも重要なことがあることを共有できた。学校評価アンケートをもとに，職員や児童の意見をもとにしてビジョンを見直すシステムを作ったり，形骸化しないよう職員，児童が常に確認できるような見える化を図ったりすること等である。また，評価をこまめにフィードバックすることも，学校経営推進に不可欠である。

